

## 翻 訳 と 解 釈

——『ロビンソン・クルーソー』のぼあい——

山 本 和 平

(i)

数年前、ダニエル・デフォー（1660—1731）の作品を二編続けて翻訳出版するということがあった。ひとつはあの『ロビンソン・クルーソー』の第一部と第二部（1719）に第三部『ロビンソン・クルーソー反省録』（1720）の抄訳を加えて一冊にしたものであり、もうひとつはあまり有名でない小説『ロクサーナ』（1724）である。<sup>(1)</sup>

『反省録』と『ロクサーナ』は先行訳のないいわゆる本邦初訳というもので、当然のことながらそれなりの苦勞も面白さもあったが、既訳のあるものでも十八世紀のテキストという呑気ではられない。そもそも orthography が確立していないから、たとえば (pistole) が、「ピストル」(拳銃)

なのか「ピストール」(スペインの古金貨)なのか、文脈——たんに言語の、だけでなく社会的、経済的な——を押さえないととんだへまをやらかすことになる。

一般に翻訳は各言語固有のルールと、言語変換のルールを覚えてしまえばあとは簡単だと思われがちだが、実は文化の翻訳を必然的に含むわけで、しかし容易ではない。論文中の引用ならば、論旨の展開上必要な部分のみ翻訳すればそれで事足りるが、文学作品の翻訳となると、その総体を一字一句省略せずに日本語に翻えす必要に迫られる。それが誠実な翻訳者の義務とされるのである。いわば、主観をまじえずに精確に移し変えること、主観的判断の排除が心がけとして要求されるわけである。

しかし誠実な翻訳、主観をまじえずに精確に移し変えることが、しかく簡単ではないことがまもなくわかるはずだ。そもそもテキストの理解そのものが——文化の質がたんに言語ばかりでなく、歴史的社会的にも異なるために——容易ではない。テキストにはそれを取り囲み支えているコンテキストがあり、テキストにとっては自明の、所与のコンテキスト——彼らにとって無意識ではあるけれど——と関連づけることが、テキスト理解にはどうしても必要となるのである。

大げさに言えば、異文化への省察と自国語自国文化への反省とを必然的にもなう翻訳という作業、この過程で翻訳者はしばしば佇立しては、コンテキストを、支配するコードを探す作業を、一般法則から細部の日常的断片的記録にいたるまで探し回る作業を、図書館のなかで右往左往しつつ続ける羽目になる。ことばを翻えすことそれ自体はなにほどのこともない。翻訳が英文和訳ではないところに、文化の翻訳であるところに困難がある。テキストはいわば、言葉で織られたテクニチュア(織物)だから、織師の意図、社会的歴史的環境というコンテキストを超えて、これを眺める人、観想する人、つまりは読者の問題関心に応じて、さまざまな模様、パタン、意味を浮かびあがらせるわけである。

さて翻訳したテキストに、いわゆる「解説」(作者および作品についての)なるものを付するにあたってわたしははたと困惑した。翻訳したテキストはいわば提示された「資料」であり、翻訳者としてはそれでもう充分で、これに「解説」を付するというのはなにほどの意味があるのか、ということである。

たとえば、デフォーという人間の「伝記」を記さねばならない。その生涯と作品について記さねばならない。そういう場合には「客観性」を重んじ極力「主観」を排することが伝記作者のみならずひろく歴史家一般の義務でなければならない、という常識と化した思い込みがわたしにはあった。ラカプラの言を借りれば歴史記述における「客観性は非個性的な、声のない声の支配を含蓄している。主観の介入(一人称代名詞の使用に示される)は、序文と結論に限られるべきである。歴史のテキストの本論中に非客観的傾向が多く混じることは、すでに確立されている札のルールを混乱させるおそれがある<sup>(2)</sup>」というわけである。むろんラカプラはこうした歴史記述の方法原理を批判しているわけで、結論から言えばわたしも、わたし流の織物の読み方を、いわゆる解釈を加えたのであった。

## (ii)

第二次大戦後の英米におけるデフォー研究はまことに目をみはるものがある。

A. D. Mckillop, E. M. Tillyard, Ian Watt, M. E. Novak, G. A. Starr, P. Hunter. などが '50年代から '60年代にかけて、新解釈を携えて登場したし、また最近では、J. J. Richetti, E. Zimmerman, P. Earle<sup>(4)</sup>らがそれぞれ Defoe とその作品を論じている。

たとえば Watt は早くも 1951 年の論文 ‘Robinson Crusoe as a myth’ で、ロビンソン・クルーソーを自立した資本主義の「文化英雄」と定義している。また Novak によれば、クルーソーは明敏な貿易商であり、有能な技術者であり、感傷を排する植民地開拓者であるが、航海と探険の時代の「生粋のイギリス人」らしく放浪であることの方をえらぶ、と言う。一方、Starr はこの作品のなかにキリスト教的な罪と回心のサイクルを認めて、伝統的な贖罪の物語、宗教的自伝としてとらえ、Hunter も、Starr 同様、反逆と罰、悔悟と救済をテーマとする宗教生活の寓話と解し、クルーソーを「熱を失った巡礼者」と定義する。

改めて言うまでもないが、「経済学はロビンソン物語を好むから」ロビンソンの孤島での生活ぶりの中に労働時間との関係で価値を説明する事例を見出したり<sup>(6)</sup>、ロビンソンの中に「正真正銘のブルジョア」<sup>(7)</sup>を認めたり、やがて ‘Homo Economicus’ と呼ばれるに至る人間類型のモデルを見たりする<sup>(8)</sup>。

こうしたさまざまな「解釈」はそれぞれの問題関心に依拠して浮かび上がった『ロビンソン・クルーソー』であって、それぞれに面白いけれど、読者の「受容」と全く重なり合うことがないところに面白さがある。たとえばわたしの場合、文学ジャンルとしての「小説」の発生という文学史的問題は別として、たとえばジュリーとかフライディなどの非白人、非キリスト教徒とロビンソンとのかわり方にひとつの大きな問題関心があった。先の研究者たちの論述は、その点ほとんど欠如していて説得的ではない。(そこで「解説」ではわたし流の「解釈」を記しておいた。)

1980 年に出版された Martin Green の *Dreams of Adventure, Deeds of Empire* (Routledge & Kegan Paul) は Wallerstein の ‘modern world system’ 理論に依拠しつつ、『ロビンソン・クルーソー』にはじまる「冒険小説」の系譜を、帝国主義の神話の見地から解明したものであった。このようにしてはじめて『ロビンソン・クルーソー』中にあるひとつの大きなモチーフ、異文化と接触しこれを支配していくキリスト教的文化というモチーフが正当に取りあげられるに至った。在来の、ヨーロッパ内の発想、ヨーロッパ文化に局限されたなかでの『ロビンソン・クルーソー』理解が、ここによく脱却できたわけである。ここでは『ロビンソン・クルーソー』は、近代世界システムの中心的な神話的表現、若者たちに帝国の拡大のための海外雄飛を呼びかける「声」として解釈され、むしろロビンソンがその英雄である。

### (iii)

こうした視点に立つと、同じ冒険小説の体裁をもつ同時代の作品『ガリヴァー旅行記』(1726) は、叙上の意味での冒険小説のいわばパロディと見ることができる。つまりスウィフトは帝国主義の神話の文学的表現形式たる「冒険小説」を使って帝国主義を揶揄しているわけである。たとえば次の一文を見よう。

「一隊の海賊が暴風雨に吹かれてどこも知らず漂流し、ついにボーイの一人が橋頭から陸地を発見する。上陸して掠奪する。無辜の住民に邂逅して、親切な待遇を受ける。そして国土に新しく命名し、国王のために領有宣言を行なって、記念に腐った板切や石柱を建てる。それから土人が二、三十人殺され、一組の男女が見本に無理に連行される。そして帰国すれば、彼らの罪業はすべて特赦を受ける。さてここでいわゆる神授権の名による新領土の建設がはじまるのである。すなわち、さっそく船団が派遣されて、土人たちは放逐されるか、殺戮されるかするし、酋長たちは拷問の果て、すっかり黄金の所在を教えてしまう。あらゆる残忍、貪婪が公然と許容され、大地は民の血に腐臭を放つのだ。そしてこの敬虔きわまる遠征に従事する呪うべき殺戮者の一隊こそ、実に彼らの

いわゆる偶像崇拜者である蛮民どもの改宗、開化を目的に送られるという近代植民の実状であるのである。」(第四篇第十二章)

デフォーが「時代精神」の代表であったのに対し、スウィフトは反時代的である。彼は「理性的人間」の立場で植民帝国主義の現実をきびしくみつめ、これを非難する。A. L. Morton はイギリス政治思想のなかに Tory radicals (radical conservatives) の系譜があるとし、こうした発言に典型的に見られる反人間的傾向への批判者としてのスウィフトをこの系譜の創始者として見ている。

以上『ロビンソン・クルーソー』をめぐるさまざまな「解釈」、コンテクスト化を例示した。前述したように文学テキストはテクスチュアであり「現実」であって「解釈」を超えたものである。ことに小説というジャンルはバフチン流に言えば、さまざまな「声」、さまざまな視座の生きた交換の中で、他のジャンルさえ取りこんで自らを絶えず革新しているジャンルである。またロラン・バルト流に言えば「文学は多くの知を背負っている。『ロビンソン・クルーソー』のような小説のなかには、歴史、地理、社会(植民地)、技術、植物学、文化人類学(ロビンソンは自然から文化への移行をおこなうのである)、などに関する知が盛りこまれている。……文学とは実在<sup>(9)</sup>なリアリテ<sup>レアリテ</sup>なのである」。文学研究者はつねに、この文学テキストという「リアリテ」との対話から出発するほかはないのである。歴史家にとって「文学」は依然、客観的事実性を欠いた怪しげな「二次資料」として排除すべき代物でしかないにしろである。

#### 註

- (1) 講談社版世界文学全集 13「デフォー」、1878年刊。集英社版世界文学全集 10「ガリヴァ旅行記、ロクサーナ」1981年刊。
- (2) Dominick Lacapra : *History & Criticism* (Cornell Univ. Press 1985)
- (3) A. D. Mckillop : *The Early Masters of English Fictions* (1956)  
E. M. Tillyard : *The Epic Strain in the English Novel* (1958)  
Iam Watt : *The Rise of the novel* (1957)  
M. E. Novak : *Economics and the Fiction of Daniel Defoe* (1962)  
G. A. Starr : *Defoe and Spiritual Autobiography* (1965)  
P. Hunter : *The Reluctant Pilgrim : Defoe's Emblematic Method and Quest for Form in Robinson Crusoe* (1966)
- (4) J. J. Richetti : *Defoe's Narratives* (1975)  
G. Zimmerman : *Defoe and the Novel* (1975)  
P. Earle : *The World of Defoe* (1976)
- (5) マルクス『資本論』第一編 第一章 第四節
- (6) 同上
- (7) エンゲルスからカウツキーへの手紙(1884. 9. 20)
- (8) 大塚久雄『社会科学における人間』(1977)
- (9) ロラン・バルト『文学の記号学』(みすず書房 1981)

(一橋大学商学部教授)